



大岡昇平全集

第十五卷

大岡昇平全集 第十五卷

定価 三五〇〇円

昭和五十年八月二十日 印刷

昭和五十年八月三十日 発行

著者 大岡昇平

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一

電話(五六一)五九二一

〒104 振替東京二一三四

検印廃止

©一九七五

大岡昇平全集
第十五卷
目次

紀行

ザルツブルクの小枝

旅の初め

水の上

医者の娘

霧笛

グランド・キャニオン

サンタ・フェの雪

スペインの苔

二人姉妹の庭

旅の終り

アメリカのシェイクスピア

アメリカ退散

89 76 66 54 46 37 33 24 17 10 3 3

鋸山奇談

ピッツバーグの一夜

パリ日記

エッフェル塔の影

イギリス紀行

スコットランドの鷗

ザルツブルクの小枝

南仏紀行

イタリヤ紀行

ギリシャ幻想

鎮魂歌

博物館めぐり

祖国観光

あとがき

文学的ソヴェイェト紀行

ソ連の思い出

出 発

ナホトカ／ハバロフスク／モスクワ

赤い広場の人々

モスクワの外国人

モスクワの「螢の光」

レニングラード

エルミターージュ博物館

ソーニャの家

ソチにて

植物園と療養所

オストロフスキイ博物館

温泉と音楽会と見張塔

トビリシに行く

あるコルホーズ

コーカサス越え

ミネラル・ウォーターの飛行場

ソ連の電話

「白痴」を観る

地区裁判所

パステルナークの墓

ソ連・ヨーロッパ音楽の旅

あとがき

文学的中国紀行

中国の旅から

文学的中国紀行

西安の旅

黄土の記憶

フィリピン紀行

フィリピン紀行

慰霊の旅

昔ながらの草の丘

フィンランド紀行

フィンランド紀行

フィンランドの旅

コルシカ紀行

コルシカの旅

コルシカ紀行

アジアクシオ

ポッツォ・ディ・ボルゴの城館

ナポレオンの家

モンテ・ドロ

コルチ

ポンテ・ノヴォの戦い

バスティアの城塞

旧港

民俗博物館

コストーリ嬢

カノニカの寺院

ボルゴ空港

あとがき

コルシカ略年譜

参考文献

解題

池田純益

429

427 425 424 416 413 405 400 397 392 388 380 376 370

年譜・著作目錄

年 譜

著作年表

著書目錄

池田純益編

571 522 443 441

紀
行

ザルツブルクの小枝

——留學生の手記——

旅の初め

タラップを踏んで、中甲板へかかり、門番みたいに、その両側に立っている男に切符を見せると、「オフイサーに渡してくれ」ということである。

いかにも少し奥には海軍士官みtainな恰好をした紅毛人がいて、差し出すより早く、私の手から切符をつまみ上げ、「サンキュー・サー」といった。そして名簿に署名させられ、

「ジス・ウェイ・サー」と室の方角を教えられると、乗船手

続は終りであった。

ついでないだと思っているのに、月日は過ぎ去り、羽田へ帰着してからでも、一年になる。横浜から太平洋航路ブレンジント・ラインのクリーヴランド号に乗り込んだのは、それから一年以上前、昭和二十八年の十月二十日であった。

吉田内閣は健在だし、二十三人の漁夫はまだ原子灰をかぶっていないかった。松川事件の第二審の判決は十一月に予定されていたが、ジャーナリズムの摘発によれば、被告のアリバイは完全なよりだから、全員無罪になるものと信じて、僕はアメリカへ発って行ったのである。

ロックフェラー財団の奨学資金を受けたので、或る進歩的評論家は「大岡は戦争の俘虜になっただけで飽き足らず、こんどはアメリカの文化的俘虜を志願した」と書いた。何て了見の狭い野郎だと呆れ返り、貧乏文士の収入では追っつかない外国旅行を、ただでして来る機会を捉えたのが何が悪いと

力み返り、途中飛行機ばかりでは面白くないとサンフランシスコまでは、わざとのろい船旅を選んだのだが、事務員がオフィサーと呼ばれ、制服を着ていたことが、ちよいとひっかかった。「サンキュー・サー」「ジス・ウェイ・サー」とみんな「サー」がつくのは、俘虜には絶対になかったことだが、あの切符をひょいとつまみあげた手付には、あまり尊敬は表現されていないかった。荷物なみの扱ひである。

上甲板のサロンには、見送りの家族や友人達が集っている。

「駄目だ、駄目だ。オフィサーと来たのが、気に喰わねえ。たしかにもう一度俘虜だ」

とおどけて見せるのは、狼狽をかくすためである。最近外遊半年の経験のあるX先生は、

「今からそり興奮してるんじゃ、先が思いやられるね」と嘲けるようにいった後、

「失敬するぞ。船が出るまで、じりじり待つのは、やり切れねえからな」といつて帰って行った。

家族は勿論、先生みたくに不人情な友達にはいないから、銅羅が鳴ってみな下船しても、行儀よく突堤へ並んで、待っていてくれる。

もう別の世界の人達なのである。彼等と僕を繋ぐものはテープ以外に何も無い。船が動き、脆い紙が切れるまでの命だ。

テープは風にあおられて、一人で二十本以上持つてる手は痺れるようである。

さらば、わが妻、わが子、元気で暮せ、という感慨がこの場合の紋切型だが、いつか平安に馴れた今日この頃では、一年後帰ってくるまで、彼等の生活がこれまでと同じ日常の繰り返しにすぎないことを、僕は疑っていない。

十年前誰にも見送られず、輸送船で門司を出た時のことを思い出す。大変な相違にはちがいないが、元来これは比べることが出来る状況であるから、ひょいと頭をかすめた程度で、過ぎた。

歩武堂々と吹奏楽団が埠頭に繰り込んで来た。横浜市で組織した楽団で、出船入船に景気をつけるためだそうである。

「越後獅子変奏曲」その他失名の流行歌は日本的であるが、中日戦争中の侮支歌謡曲「支那の夜」が奏せられたのは、いかなる理由によるものか。さらに「軍艦マーチ」に到っては、全く了解を絶しているが、ここでまたもやかつて奴隸のように死地へ積み出された身が、十年後平和裡に目度く外遊の途に上ろうという時、復活軍歌によって送られる皮肉に思いを到した。祖国が再び愚劣に赴きつつあることを、出発間際に確認させて下さって、ありがとう。

先にあるのはまる一年の休暇で、一切の責任を解除された僕は、心も軽く身も軽く、感受性を研ぎ澄まして、耳目に触

れる異国の森羅万象に、鋭敏且つ貪婪に反応せんと身構える。汽笛が鳴り、船が動き、打ち振る手の波、ハンケチの波。ちぎれたテープはどっと風にあおられて、舷側の欄干にからみつく。陸の人々の顔かたちは、白く不分明になり、やがて船先の建造物に隔てられて見えなくなってしまうと、最早日本に未練はない。港をかこむ丘の線、磯子から、追浜、横須賀に至る祖国の土地を凝視する感傷もなく、僕はさっさと船室に帰った。

四時半である。室は五畳ぐらいの広さ、無論窓などない安部屋であるが、暖房も換気も申分あるはずはない。壁から引き出しのベッド、シャワー、扇風機、片側の机の上には、ていねいに聖書がのっている。電話機ものっているから、もろにそいつを取りはずして、ルーム・サービスの番号を廻した。大事なのはまずルーム・ボーイにチップをやることだ、とは経験者の説くところである。一航海、室代の一割として、まずその半額を渡しておく方がよいと教わっていた。だからルーム・ボーイを呼びつけて、札びらを切つてやろうという寸法である。

男の声が出たから、
「ルーム・ボーイに来て貰ってくれ」と怒鳴ると、「ホワッ」と来た。

英会話の練習は積む暇がなかったが、フィリピンの俘虜收容所で通訳をした腕前で、何とか日常の用は足りる自信を持っていたのである。「ホワッ」には少なからず、自尊心を傷つけられ、ゆっくり同じフレーズを繰り返したが、残念ながら通じない。

「ホワ・ドウ・ユ・ウオント・サー」

「ワイル・ユ・プリーズ・ショー・アップ・ヒヤ・エネウエイ」

ショーアップは「顔を出す」というほどの感じの言葉である。俘虜はよくこの言葉で收容所の事務所へ出頭を命ぜられたものだ。それが口に出たわけである。

「ファム」とか何とか、不満気な呟きで電話が切れた。

「ざまあ見やがれ」と机の前に正座し、ドアを見詰めて待っているが、ボーイはなかなか「出頭」しない。船はもうかなり速度を出しているらしく、急テンポなエンジンの響きが室をゆるがしている。廊下に足音がするような気がするが、予期するノックはなく、すつと通りすぎてしまう。「怒らしたかな」と少々心配になって来た途端、ドアの内側の把手にかかった円い札に眼が止った。

「DO NOT DISTURB」

「邪魔するなかれ」としか意味の取りようがない言葉である。はてな、客が「邪魔をする」のは、用をいいつけるぐらいのものだが、それがいけないとはいかなる理由によるものか。

船が出たで、船内多忙の折の臨時的処置か。今ボーイを呼んだのは、規則違反で、そのため来ないのか。

しかしいくらアメリカ船とはいえ、これは客船である。そしてこっちはいくら日本人でも払うべきものは払っている。切符もちゃんとオフィサーに取り上げられた。「邪魔するな」とはあんまりなめるなど近寄り、手に取れば札は取りはずしがきく。

やっと気がついたのは、この札が今は内側にあるが、元来外側にあるべきものだということである。こっちの必要に応じて外へ掛け、例えば午睡を妨げられるのを防ぐのに用いるべきである。

やれやれ、とほっとひと息。成程外国旅行は馴れるまで楽じゃないぞ、と観念したが、そんならボーイが来ないのは、怪しからんということになる。

もう一度電話かけてやるうか、しかしまた「ホワツ」を聞かされるのはいやだが、と迷っているうちに、DONNO DRESSINGのドアがすっと音もなく開いた。

臙脂色のお仕着せに、「五番」と番号をつけて、丸顔の小男が半身を突込み、「アン」といった。

本来なら「何故ノックして入らないんだ」と怒鳴るところだろうが、この「アン」にどきもを抜かれてしまったのである。

「アン」は「コラ」と共に昔の巡査の口癖で、甚だ侮蔑的な言葉である。アメリカのボーイで、まさか髭をひねりはしないが（また髭も生やしていなかったが）あごをちょっとあげて、見下した姿勢はそっくりである。片手はドアの把手を握ったままだ。

「コーヒーが一杯もらいたい」
「ファム、何故それを電話でいわないか」

この調子でサンフランシスコまでやられちゃ堪らない。とにかく札を出すに限ると、おもむろに十ドル紙幣を抜き出し、無言で突きつけた。相手は怪訝な顔付で札と僕の顔を見比べる、

「こりゃ何ですか」

「あらゆることのためだよ」

「コーヒーがお入用ですか」

「そうだ」

「直ちに持って参ります」

と、ここでボーイはやっと笑い、札を取り片目をつぶって引込んだ。

再び「ざまあ見ろ」で、意気軒昂、気はすでにクリーヴランド号を呑む概があるが、あの「アン」を喰った時の打撃は甚大である。船中のボーイがみんな日本人の客に「アン」といってもいいと思っているとすると、これから大奮闘を要す